石黒医官北征日記 乙

洋学文庫
文庫8
J304
2

蹇けり余及小沢大井早川の四人此中に宿て
荒木氏梨子二個を推ゝ来て曰此地の梨子本
邦のものと同からも形味共に美れり微に紅色を
帯ふ其往年邦のものと同からも今朝数顆を得
て敢て珍客の為に供せと之を人に紹介せ
羨し余曰今多之を喫せも之を君に於て急き帰途
推ゝ帰りて有栖川宮殿下に献せんと出て病
室を巡視せ患者十人あり皆赤痢之岩田
三等軍医此変に与て之を督せ岩田氏
八月を以て本邦を発し連特茲に与り来る冬衣

を得て坂行せる夫婦を人々と恐れて邪
行李中より襦衣袴を出して贈る夜半寒威孔
だ徹て大井氏起きて屋後より藁を温
突に焚きて室を暖む帰途屋辺の鼓尿を
踏む水ありて洗ふ紙ハを逆に珎菊の呂袋
を後り屋外に棄て喃々嘆息を発す土屋
遠遠糞多り燈ありて夜行せるときハ之を
踏むを免れさるし

夜来荒木氏来語を語中云へる如く氏元山より
牛五十九頭を率きて此地に向ふ途中成川に
二十頭を増殖し都合七十九頭途中後に数
れ此地に達せる者僅に三頭のみ牛疫の恐る
へきに随て運輸の困難なること以て量り知
るへし

十月五日晴朝四十一度早起外を見れハ霜重
の如し大井氏往きて温突に藁を加へ室を暖む
朝飯を喫す荒木氏側に坐して語りて曰此地
一士族金用横と云頗る心を邦に傾ハ少く
処に拠れハ其父支那人の為に殺さる故に支那を
讐とし心を邦に寄せる事と云此人と支

の募集と他兵站部の為と事と尽さ不多
一昨二日天長節と雪と詩を賦して寄せ来
詩十四
奉献　大日本帝国　天皇誕日韻
荒城山人坐茶
誕日西当十月天徴成貂尾猥矣逢旧宛
将雪多含徳逗為　天皇祝萬年
此句攄告僕之所蘊
一代名臣徳業尊為銜国命仕馳奔　天皇
若向天涯事須敢鯤祝聖恩
以鄰交同盟之厚誼動兵天涯欲雪我義
百年之累凡是鯤鮋之民孰無感誠是
以誦詠
大学進士　仙坡　金用梯謹稿
兵站部員十別れ独駅逗十上る行くこと十餘所山
坂頻る陰之馬を牽きて地迂中才三師団の追給
服を車送きること尺る山坂を越ゆるに一車三人若
くハ四人を之を挽く是七八月の頃陸軍省の令
地十送れる荷車数十輌の中にて平壌以道
途良好なるを以て之を用るもの所車鎌ゆ多

浦なるの間に道途狹隘の処あるを過ぎて
得たり此道なるを始て之を用ゐを入る之山坂を
越えて平地に出ること許にて又みなとの山上を行くこと
凡一里餘人馬を牽きて過る者数多きを
遇ふ山上最高き所に鴨緑江を一望す義州眼
下なり其景壯絶山を下りて数所石橋を渡て
市街なる建を行くこと数町始て間門なる間門
龍川なる比なれば数の壯麗門内の人和人と共に数の群
集して然れども皆一時来集の人にて都人士は旧居に
安まるにあらざるを兵站司令部なる又兵站監
部なる兵站監部は州府にて兵站監塩谷
少将之を居り握手日を詰て午後を喫し柴田軍
医正伊藤軍医正道に病院なる病者を巡
診す柴田氏は六月以来第五師団の野戦病院も
として終始此軍に後い治療親切恢の信を得り
と云余病室を巡るの際慰諭し後来を
勵ます病院なるは大連城の役なる負傷したる
者九十六名内科病者五百三十余名不の民屋な
る立ち就中負傷者と赤病者とを必診し
治方を商議し馬なる騎て義州なる発し市外な

出ハ数騎ヲ出セラルヽアリ近ツキ之ヲ五師
團軍医部長菊池萬忠一等軍医筑摩定
太郎一等軍医山本某之馬上ヨリ握手ス積日の
労を慰ス菜池氏ハ暴ヲ冒シ五師團長ト共ニ
釜山ヨリ陸行シテ京城ニ到リ平壌の役ヲ終ヘ
進ミテ今九連城ニ至リ者之菜池氏日今午前
閣下来ラの豫報ヲ接シ石坂軍医総監ト共ニ
来リ迎ヘントセシヲ総監ハ軍司令官ニ随ヒ安東
縣ニ至リ本日在ラス故ニ之ニ代リ支人トセシ迎ヘ
ト依テ書ヲ連ネテ進ミ鴨緑江ヲ渡ル鴨緑

江の西岸ハ朝鮮監税局アリ磧ヲ行ク五十町
假橋アリ暴ヲ我軍ハ架セシ所之又磧ヲ進ム
数町又一の假橋ヲ渡ル亦我兵の架設ス所
之橋ヲ渡リ沙嶋数丁ヲ経テ又一河アリ之ヲ霞
河ト云亦我兵架セシ所の一橋ヲ渡リ後ヲ顧
ルハ沙磧実許遠ク義州の山角ヲ繞軍亭ヲ
又右ニ偉山の聳ユルヲ望ム此間ハ数の英新
戦場ヲ経テ狂河風の腥キヲ冒シ行ク数町
新築の砲壘ヲ経テ一市ニ入リ九連城ニ入ル
九連城ハ城郭ヲ非ス唯ダ山裾

鴨緑江ニ臨むや九次て天兵の城ニあり故ニ名
づくと云ふ大連隊入るや満目皆軍人佐と餘人を
見ず自ら我家ニ入るの想をなす將ニ軍司令部
ニ入ラんとし門を入れハ石坂軍医總監出来て曰
閣下已ニ遠く今將ニ安東縣ヨリ帰り裝を整
へて出迎へんとす而して乃共ニ其室ニ入れ抱擁
して積日の労を慰む此軍司令部ハ元稅関
なりと云い或ハ地方廳ニして云ふ其改廳の一
部を司令官及参謀の居室とし中間の右室
を砲兵及工兵部とす黒田少將矢野大佐以
下三人居る而て其左室を軍医部とし石坂
軍医總監山内一等軍医以下三人居る薄暮
本軍司令官山縣大將安東縣ヨリ帰りて
の報あり往て謁す伯の居室凡六畳其三畳
ハ床ヨリ以て寝ぬへし其三畳ハ磚瓦を敷き
椅子を置きて以て客ニ接するのみなり軍議
参畫飲食起居皆此中ニ於てなる之一禮を了
陛下の御近状を謹述し次ニ官事を述へ了
りて伯ハ床上ニ坐し余ハ椅子ニ倚り近事を談す
伯從卒ニ命し晩餐を出さしむ其品ハ即ち

客席其肴八即ち鮒膾一皿味噌汁一椀なり伯曰
此膾は日初て得る所皆之を珎とし特に余に供せ
らまゝ其半を分ちて君に供せんと箸と皿とを
徵して余に分らる但皿を徵せるも皿なく木椀に之を
盛れり余推辞すれども三鞭酒二罎を伯に贈る
伯喜ぶて直に其栓を拔きて之を傾く亦三
鞭盃なく茶碗に注きて之を傾け鼓吉して曰
妙なと談ずるを数刻に及ぶ時に五ツ辞して軍医部
に帰る石坂曰帰り何を迄きゝ余曰司令官伯
爵の膾を食し余は三鞭を挙げて以て談真に
入り遂に時を移せりと石坂曰早く鮒膾三鞭のあ
るを知らば余も亦推して席に陪すべきに今や已に晩
しと大に失望の色を入るる者あり参謀長小川少将
之三人炉を囲み五十快談午夜に及び分れ寢に
就く
山縣伯は第一軍に司令官たるのみなれば位置已
に高く八八則高度出れば車馬無ければ其
外徒に出でゝ一四の鮒膾を以て之を珎とし一襲衣
の毛布以て此寒を防ぐ軍に外に後れる者其苦
推知すべきのみ

十一月六日晴氣三十五度和蘭海軍医二来る其十
野津師團長大嶋旅團長等を歴訪一戸五
師團軍医部より五ヶ所の軍医皆集る一ヶ
之十面一日来の労を慰し上後来の〆布を陳ス
ろうと馬十騎一谷間を出る山上十砲を有る山麓
を直り渡谷を後りて高きまゝハ三米実低きも一
米餘巾さ凡二米其長さを測ルハ凡四里十五
と云而て変ヶ巨砲を据きるの壇を設く又縦横
巨砲を通ずべき軍道を開りて工事の壮なる敢
年を要すべきまゝと為すゆゑ依ルハ也ト

月餘にて成功せしもの之ヶと云ふ工夫の多き想ふ
べし而て不ヶ十四里を設け里中土舎（エルデヶ）ヲ
ラントヒグルーベンヒ二ツトを合するもの）を設く其
式地面を掘ること深凡一米幅凡三米長さ凡五米
其上十ヶ所ヶ凡一米半の宮窿状の屋根を作り
糸粱の藁を編みて之を掩ひ上十粗布若くハ
厚紙等を展べて泥土を塗る或ハアンペラを以て
屋蓋を作るまゝあり其中暗黒之と虫も寒を
防ぐ十足るべし我兵の之十入る者往ヶ其屋上十大
さ凡二尺餘の四窓を穿ち分捕の今を一ヶ之

を敏み以て明を示る但支那兵去るに臨て今を
遺棄せらるゝ者数枚兵到るを俟ち以て
此土舎ハ一墨の中数十棟を連設し一墨四百人
以上を容るゝに足る蓋一墨一営を為さるも
九連城及安東県の附近に為るまて之を設る
彩一間ゝ工事未ゝ完成に至らさるものあり其
築造法の美同洋細ハ営務日誌に細録を但
彼の九連城附近に防駐せしめ十餘営の歩兵の
多くハ此中に駐軍ゝるものとして其遺留せし大砲
小銃弾薬の外に今捉焼食炊竈等ありて
考ふるに十分此地に久ゝ営を為すに決ゝるものゝ
を知る砲墨を巡視するの際予三野戦病院に
到る病院ハ九連城後山の一部にして三方に丘陵
夏の頗る寒風を防ぐの足るの地を為る一墨を撰
定せしものゝ墨中数棟の土舎あり其構造前
述のものと同一ゝ門前柳美を以て緑門を作り正
中に大なる菜花の御紋を表せ近つき入ゝハ玉
蜀黍を以て花瓣を作り蕃椒を以て芯蕊とす
遠きより之を入ゝハ黄雑紅蘂蝦夷菊を
入り諸夏に中看護長以下狩白の夏袴を穿つ

泥土生じて成さとなる而破綻せしを補之
或ハ黒色の羅紗或ハ赤き毛布なし以てさまあり
戦所進給の困難なる以て知るべきのみ日来兵士
の地のかき者を入ること教回心を痛きもあるを一方
あらさるも今秋傷生員の此裝を為せるを又多
及て殊に淡巻もるを能ハも横領て密に眼
過を拭い其恙ふきを祝し各棟を点検を心得
日毎に人々道路困難戦に逢ふと教回部
も拘らも外科器械を初め諸社の傷生材料
教四五月然平日に実あるを之を尺て心に快き

こと限りなし点検して後本の注意を示も
此隊書て歌の騎兵を襲ハし時倉卒之を
追撃して獲る所之とて白馬二頭駑馬一疋を
伺養せり出て他の諸隊を必る諸隊も亦多く
ハ土倉の中に立り各隊の将校知人多く皆尾
山成歓及平壌九連の諸役を経来て
或ハ負傷の事を語り或ハ友人の壮死を詰
一度嶋に立る係友の安否を問い悲歓交
至る而して其何人に逢を拘らも已れの功
績を言ハ来て一十 陛下の御威稜に

依りて之を考へ言ふ我軍の連戦連勝する故
ありさまあらさる之終に一砲墨を入る事数
分捕の武器を集むるルップ野砲二十
餘門支那製山砲又二十餘門小銃数
軍旗戈鉾の類多くして林の如し銃
の弾薬を箱に詰めたる者約四百五十
箱発大砲弾薬二箱餘発皆此に落ち
数町を隔て一将官の一卒を従へて登山
後を歩きるを見る望遠鏡を以て之を見れ
ハ即山和大将と更に歩を其方向に轉て

之に追及し共に山を下り薄暮営に帰る食
後山和大将を訪ふ快活数刻軍歌流行
の事に及ぶ伯曰余最も一曲を作ると云へ
と共曲に題して鴨緑江の曲と云ふ曰
尊とかりける皇の御稜威八四方に輝き
我ら日出の大夫ら 朝の出旗翻し
向ふ軍の鋒先に 靡く草のあるへきや
かゆる塵も破れ散り いらる岩も砕れ散り
進むやすゝむ大小の 鉄の仁王に山川も
とよめき渡り進る 雨や雷鼓の丈の中

余を惜む人々おき　進み進みて茅のむも
屈しぶる事退きて　生きん心の人々おき
進みや進む清國の　心太くも恃みてし
世石の数み限りおき　おれと名高き九連城
渡れや渡れ鴨緑江　ふるしや渡れ鴨緑江
憂ふして低声歌の一回余曰閣下三軍を叱咤
きるの声あるて又此曲を歌ふ声を有す雲時
すて九連の堅城を拔くもるも亦宜なる哉と大
将曰君も亦近日頗る賛辞を巧みを加ふ油断
ありもと共に大に笑ふ

十月七日晴暖夜十時後五十二度の温之朝
八時石坂美代二氏と共に騎して安東縣に赴く途
九連城を河に沿ふて行くこと里許にして河を渡る
橋上桂中將（戸三師團長）に逢ふ山縣大將に
招ぎて九連城に赴くこと曰午時を過ぎて安東縣に帰る
へー君須らく城塞を待ふれと早く去別れて
小丘を越丘上路傍に棺数個を并ふ其中一棺
蓋を開け中に屍の露出するを人ふ蓋を知の人
夫或は妻子の物語あんとし試に之を開きしかん
既に丘を越中左方に農家あり庭屋石塀家大

第九人を入れて行くこと里許右方数戸の小村を
入る揚柳黄青風致きはめて言山交ゝ堡壘
を築き墨中土舎を排して数丈坦道を往くこと
里許遂に市街を入る之を安東縣と称す人
口約一河あり我兵之架橋を図り天
幕あり番兵之に居り第三師団軍医長中泉正
部員山本軍医安香某剃髪を随へ騎して来り
迎ふ騎上握手五十余言を祝し導かれて安東
縣に入る安東縣八戸数千七百家屋多く八棟瓦
造にして其大なるもの八凡一町四面一郭を為す蛟

殷富の一市之守くれ八山東省の人此地に
来て商をなす者多し其産八附近の大豆を
集め油を搾取して伯力に販賣すると鴨緑江
流に於て伐出す処の木材を此地に集めて販賣
すること此二業実に此地の富を為す而して之を先
等られて第三師団傷生隊に為る隊八一の油廠
を以て器に充つ故に固より家人多く後に炊具に
皆本隊携帯する処のものを以て之を辨ず唯搾油
の器械依然存するのみ和用する所の
搾油器械と僅に搾造に異なれば豆を

但碎きるの具とをて八数頭の牛を用ひて運用
きるの装置とをて其規模の大なる未だ嘗て見
さる所之傷生隊を祝ろうて新設の民生局改
とをる村外務書記官高橋長之助氏カ
改廠をて指造美麗恰も黄檗宗の寺の如し
就中入るへきものハ牢獄之ニさ凡五米突の煉
瓦塀を以て之を周匝し中ニ木柵の囚圄を設ケ
或ハ五人或ハ三人囚徒を区劃し本邦の巡査之を
監守も改廠を辞し三師團ヲ三野戦病院ト
ヲ院長代理ヲ賀一等軍医ト導れて各所を

及ひ此病院ハ市内の最大なる商家二廛を以て
之ヲ充病者凡百六十人を容ふへし而て屋宇
美麗之ニ為も孰を避けて人ちも狼藉を極む
美麗なる紫檀の椅子あるいハ恩ハ八の茶碗
なく壁ヲ錦繡を貼きるも而なるも坐ヲ土を掩ふ
の席なき処ちり荒廃乱雑極りなと謂ふへし
各病室を巡診きるヲ赤痢患者最も多く又
十餘名の室扶斯患者あり一等軍医牧野
慎一氏も亦室扶斯ヲ罹り此ヲ臥ヲ病ヲ重
し余を入て手を握り五十両眼涙を浮へて一語

ふ一余其心を強之を諭て別る(牧野其
十四日を以て逝矣)其病室ハ皆温突の装置ち
寒時之を焚けハ蓋一温を取ること十分ふ此ハ各
室僅十三四人を容ふ止て尤看護を不便
之就中最も奇ふハ一室ハ関帝を祀り恰も佛
壇の如きあり又一室ハ壁に大なる春画数枚を貼
ちあり各室を巡視して其関帝室にて午
飯を喫す此地分捕の麺粉油豆粗塩等最
多く看護手某蒸麺と巧之と餅麺を製し
て午食を味頗る美ふる而已ふらず既に訣
別ふる同僚諸氏と卓を共にして食ふ其快言
語に絶す談笑して會食を食後談話数時
軍吏濱田某分捕品中患者に利ふるものを出
して之を示す曰唐紙曰豆油曰麺粉曰アン
ペラ曰洟瓶而して芳賀曰洟瓶数個就中特
に美ふるものあり以て将校の用に供せんと之を尤
も洟瓶にふらずして陶製の長枕之其形ハ
獲其両蝶肩に一孔を穿ちて水を容ふの
所とす芳賀之を以て上等の洟瓶とせり亦
豆之余笑を逞して問ふて曰将校の洟瓶既に

之を見て一笑と芳賀曰未だ余之を於て其実
を告げ一個を之に示す衆皆大笑ふ軍吏某氏
一把の紫檀管を出して曰閣下博識識らも
警官以て何の用ゆる為ものや余熟視久しうして其
用を審さず枉げて設問ふて曰是支那人
法螺を吹く管なり軍吏曰昨之を土人に問ふ
此地竹多く貴紳之を以て烟管となすと云余
以為く不知為不知是知也と我今自ら之を証
せと恵者に用ふる所の粥を撥ずるに米頗る良
好なりと之を軍吏に告ぐ軍吏曰此粥於健兵
の食に称るを数等後刻兵舎を巡りて其食ふ
所の米を撥せられしより乃ち其粥米数合を以て
帰る所の病院に入りて他の兵舎を巡視し
歩兵第十八聯隊長佐藤正氏に逢ふ握手連日
の偉功を祝す佐藤曰余の分捕品中清軍陣
営の図画一帖あり希くは閣下に煩して之を
陛下に奉らんと余其の之を諾す砲兵営に
到り兵食を撥ず即ち前刻病院軍吏の言
の如く其粮米頗る悪しと雖も之を行李に納
むと分捕米を以て盛子軍米局の貯ふる所

蓋清兵盛京軍の如きハ専ら米を用ひ多
く麺包を食し米飯ハ豚肉汁を加へて之を食
ふを以て此の如き粗米も猶之を捨てず
因て訳官兵站の運輸既に緒に就き数十日
の糧備ハるも黄海結氷を恐れハ如何の抵路を
絶て故に結氷五箇月間の粮食諸品を備
積しるるに非ハ猶未だ安心せず豆を以て先
此分捕の粗米を食して備糧の儲積を富
饒せんことを謀るべし千里遠征の軍外に立て
心身を焦苦するの情察すべきなり

硯兵営を廻りて第三師団司令部に到る
三師団司令部ハ山猪の寺院なり此寺院
建築新にして彫刻朱棟金碧燦然四棟
二門あり其一棟一門ハ正に佛を安置し厳然
其具足を全ふして三棟一門ハ師団司令部之
居る司令部に至り桂中将に会ふ中将用ひる処
の茶具頗る備ハり他の不自由なるの比にあらず
恠て之を問ハ中将笑ひて曰将校遠征国より
百般の器具を備ふ(へ)し余曰疑らくハ分捕
ならん何ぞ之ハ煎る処の茶此器具と合ハず

し中将日君の鑒識に對して其実を告げ実
は此室清将宋慶の居りしを以て此志異なり
宋の遺して而して遺るを和之其最球奇なる
を示すとして失なうる所のものは日本国之を図か
彼三才図繪に載せる所のものを模刻したるも
のにして日本四国九州を三別し東京のやきは尤も
大坂の地位を圏して江戸と称せ而して宋は自から所
に紅紙を貼せ次に出せる父のものは朝鮮図なり是
亦五六十年前の印刷にして山川里程尤も詳なり
なるも亦宋自ら紅紙を貼して之を敷語を録し
たるものにして中将其朝鮮図を按して曰希は君に依
りて之を厳覓に供せんと余諾して之を納む喫茶
数杯に倦に書あるを人に取て之を閲せん
は武経七書にして孫子呉子尉繚子六韜三略等
皆備はる蓋宋の遺留物なり余笑て曰昔年語を
佐久間象山先生に受く曰知彼知己尚考戦を
語るべからず彼を知り己を知り彼の能はざる所を能
くして己の能くする所を失はざるを以て始て方今の戦を
語るべし将軍清兵を破るに七書の兵法に依る所
豆之に中将其大に笑て辞して座を出奏謀部

ゑり騎兵少佐閑院宮殿下ナ謁シ恭ク其御健
康ト鴨緑江ノ役軍功ヲ奏セラレ少佐ナ進級ヲ
ラセラレタルヲ賀シ奉ル殿下ハ第三師團司令部附
トシテ司令部ナ去ラセラレテ他ノ佐官ト共ニ事ヲ
執リ玉フ遠征ノ久シキヲ厭ハセ玉フコトヲ思ヒ勇壮
活潑ナマシマシニ軍医部ナ去リ處務ヲ擯ヒテ帰
途ナ上ル中泉以下騎ヲ送リ市外ナ至リテ別ル
半月清空ナ照ラシ夜色清絶恰モ秋夜カ如ク寒
暖計五十二度六分半寓ナ帰ル
九連城山一樹ノ枯草滿眼山陽暖ル処偶ク
一茎ノ野菊ヲ開テ寒風ニ耐フル忽以為ラク新
日本ノ花以テ我　皇后陛下ナ献セヘシト摘ミ
取リテ紙ニ裹ミ懐ニシテ帰ル余好テ古人ノ詩
歌ヲ誦セルモ未ダ歌ヲ学ブヒトニ帰途
一首ヲ得ル添ヘテ以テ郵筒ナ納レ皇后太夫
香川子爵ナ郵送セリ
新日本九連城ニテ摘ミ野菊ノ花ヲ
添ヘテ奉ル
新ラシ君ノ恵カラ匂ヒテ
色香サヘ添フ野菊ノ秋草

食後山縣大将を訪ふ未だ就寝せず野
津中将大嶋少将余の寓を訪ふるの報あり早く
寓に帰る二将共に早川龍介君坐に在り談
熟し夜長く夜半に至りて散ず
此日安東郡に於て所々故の舊営を尋ね隅
牛尿のかきまあり其臭鴉片に似る取りて
擦れば果して吸烟鴉片之同行の安食某剤
官に交付し精製以て薬料に供せむ盛軍
のかき近年鴉片を吸用するもの増殖し大に兵
力を減ずるを以て八本年九月神尾少佐清

国より帰り御前に於て奏上せし報告中に曰
一の果して今日支那を吸ふ時之此屋の庖厨に
於て二個の古瓢あり中に蔬菜の種を蔵す古
朴愛す人一取りて之を馬丁に負ハしめて帰る
人見て以て異とす
此地方總て我新占領なるを以て其土産を
陛下に献せんと考へ一考せしに果て所々の茅
圃に巨菜の秀つるを尋ぬ山東菜の一種にて
尤巨株をなすもの之を幸便に付し廣嶋
行在所に奉らんとす石坂軍医総監に托す

又桑麻の事を尋ね一ヶ所養蚕の業ありも
山ヶ柏樹多きを以て山繭を養い又麻を作り
と云真絲織物を尋ねるに乱後之を得ざる由
なり一家ヶ於て麻を堆積さるを入る更数條を
取て　皇后陛下に献せんとして行李ヶ納む
十一月八日雲翔山和大将を訪ふ大将曰夜来胃
部安らかざるを診さるに宿痾の胃加答兒食
物ならず発するを伯曰無朝葛湯を喫せ今又
之を喫せんとせば何と余曰善即ち余良好の
山慈姑粉(カタクリ)を煎じ之を分ち伯曰未だ嘗
試せざる之を試んと因りて高ヶ帰り山慈姑粉を
行李ヶ推入行きて就ら調和して進む伯曰美
なり之を之ふ依て半袋を多ち呈す伯の従
者側ら曰閣下猶白糖を煎ずるを余曰有
従者曰貯ふる所の白糖既ヶ減ず希ふ其半を
分ち給ふと又諾して之を分つ戦地物品ヶ乏きを
将官と雖も概ね此の如し一将校食ヶ臨みて梅干
の大小を比較して幸不幸を笑談するも亦冥之伯
又曰此地を占領せるや敵の遺せる所の駱駝一頭
あり今之を前圃ヶ飼ふ君幸きて以て帰り

陛下より賜せられし余が白馬を御し又人を御するに於
ては頗る経験あるも未だ曾て駱駝を御せしこと
なし後刻之を試んと欲して試みに之を
牽くに駱駝俊敏なれば徳然として坐し之を鞭ち
之を押すも動せず其好む所の飼料を前に
まれば一二歩を歩むも食終せざるに前の如
し故を牽きて途上より半途にして坐するに異
所謂進退維谷なる者歟と陷られたるを笑し之を
辞せり因て思ふ食を与へて動く者豈啻駱駝
のみならんや食へば則後ずさるは未駱駝のみ
ならんや噫

午前風起り鴨緑江の方より雪を沙塵雲の如
く寒さ加へ初めて此地寒風の実を知る
を得たり此日石坂総監と細川官事を訪ひ薄
暮野津中将を訪ひ十時寓に帰り寝に入る夜
深うして益寒し午前一時に到て戸外に出て炊
を点じて寒暖計を検するに摂氏の零下四度之
風既に息星光輝くに歩して哨兵二所を巡視
し兵の背を撫し寒を問へば曰猶未だ十月九日
廣嶋に於ける大寒の時なるも酷しと共言を交す

兵の朴安なるを嘆し寓に帰て後寝に入る
屋後に厠二ヵ所あり一ハ将官の厠にて一ハ将校の
通厠なり其一通厠ハ琴書の物置小屋を厠と
なすもの十にて唯奇なるハ分捕軍鼓の皮を張
紙に張りて以て燈を点し夜間之を当てもの
其将校官厠ハ二方壁なく分捕の軍旗を垂
れ砲丸を結び付けて重錘とし風の来て靡きを
防ぐ之其前に無きハ青地に白く陣字を見
はさもの
九日朝三十二度午後五十度朝戸外結氷厚し

嘸水之を覆ひ斬ぬに氷を結ぶ依て山和伯を
訪い別を告ぐ伯衣を正して帰後奏上き各
項を托され又知人諸氏に書状を傳言として托さ
別れて参謀部に至り小川少将に別を告げ而し
られを告て寓に帰り旅装を束ね門を出れハ
山縣伯小川少将田村中佐須知副官石坂軍
医総監早川龍介及衛生部諸員送り来る市
外に五り余大将伯に向い禮を曰閣下狂微恙あ
り強て此に於て別をふさんとをこゝに握手伯に
別る小川少将ハ送て駿河に至て別れ石坂菊池

白村武谷中舘の族氏皆送りて義州まで
鴨緑江の支流を渡るや薄氷狹間あり
石坂載れて曰為汝渡る無一術みな馬を
躍りて之を渡る豈図んや泥深く沼と馬足を
没し石坂鞍を落半身水に浸し陸に上りて狂
載れて曰吉也水に潤わずして来たる防ぐの法今
より之を実験して可し と同行者皆笑ふ
鴨緑江を渡るを聞きて大に記すべき事あり義州
九連城の間僅に鴨緑江の一水を隔つのみ鴨緑
江大なること亦二里より廣からずして此一水を隔て

山水家屋風俗に亦一も同きものなし義州は
赤幹青葉の松多く九連城に五株の松を入れ義
州の民家は韓風矮小の泥屋なれば九連城に
煙突石造義州は白き韓衣にて九連城にはまれ
支那産豈言山水家屋風俗のみならんや人智
に於ても義州の人は便利き韓銭を尊みて銀貨
を好まず九連の人は金銀の便利なる韓銭の
便直なきを辨別せず但文字を知る者の数に
りては余の人に比べれば韓人の字を知る者遥に支
那人の上なれば韓人は多くは字を知り支那人は字を

知らさる者多し義州より達せし小池来り迎ふ其ナ
兵站軍医部ナるを馬を休め歩して紫田軍医
正孫谷軍医正等を随へて病院を巡視す病
床ナる者将校二十餘人内士官負傷者之下
士卒人夫を混して四百六十餘人内負傷者二
十餘名之病院本部ナ天幕を張り専負傷者
ナ手術を行ふの所とす二等軍医ト学士紙勢
静太之ナ許さり此場用ふるのみ柱ノ分捕
品を集て之を辨せしめ例ハ紫檀の
箪笥司を建て手術室とす等比ト皆然り

其病院ナ假用せらるるハ收税局ナ僅ナ十餘
人を容るへく他ハ轉ト近傍の民家を以て之ナ
充つるに如ナ五百の患者を容るナハ殆ト百戸を
要ナ之を撫恤せるる医官及看護手ハ勞察
せへきのみ一等監督井手正章室扶斯ナ羅
り又此地ナ所も往て診ス症頗る重ー紫田級
谷等ト治方を商議して別る病院を出て孔廟
ナ詣ス孔廟ハ建築壮雅極るナ丹朱を以て
大成殿を正中ト一外門中門を以て二区ナ
区劃ー大成殿ナハ孔聖及孔門十哲ヲ

孟子廟の木主を祀り傷寒講堂及書庫を設く
庫中狼藉書冊紛乱して蔓延し周易零
本散乱せるを入る足を容るゝ能はず戸外
に入て去る小池其廊下に繪具鉢数個を拾
収し持帰て庖厨の用に供す歩を轉じ石坂に
導れて統軍亭に登る亭八義州府の鴨緑
江に臨める最高の崖上に立て造構壮大彩棟
朱柱巍然として高く秀つ之に登れば鴨緑
江鴨河の二川を跨えて九連城方を一眸の中に
収む亭に軍を統ふるの所之亭面に大額を掲げ
題して曰く統軍亭と其他古今の名士茲に
遊ぶもの文章詩歌を刻して以て額とし掲
くるもの数百一一讀む能はざる者九連城
を破るの際第一軍司令官山縣大将伯爵に
して以て軍を統へしと云嗚呼此亭既に古
建設以来真に統軍を以て歌に号ぶること
数度なりし今我将統軍の所と為る真に其
名に負うさる之登臨数世石坂某氏指呼
當日の義戦を語る話中閑院宮殿下の勇奮
駿馬に跨りて鴨河を渡り給ひしことを語る

亭を下り路を特して寓に帰れば大井氏迎へて曰
今日豚を屠り各種に調理して大に饗せんとも
と乗に入れば板盤已に備はり其食机は鉢盛の
食器に非ず椀碗等なるも器具に乏しく只一も備はらも
豚膾を盛るに至るまで之を菜葉盛り煮豚を銚
詰の字鉢に盛り豚腸を石油の空罐に盛り各一
破一分者を推て食卓を囲んでせき其実者則
石坂軍医総監菊池軍医監田村歩兵中佐武
谷軍医正中舘軍医及び志摩氏等の人則
小池正直及大井玄洞之而て調理則大井及其
僕の手に成り而て云且食い且飲斜陽に至り
菊池田村二氏は辞して去り石坂総監
は余と共に北に宿し武谷中舘は病院に子て泊す
点燈及び茨を坐隅故紙数冊を取て之を
見れば康熙年間地鎮駐兵の撥閲名簿
なり其三冊を行李に收む夜半将に寝に入らん
とし上厠せんと欲し燭を点して戸を出れば屋後
数歩に火を失するを見る火燄天に漲り沁溪声
あり往て之を見れば一戸火を失して焚焼せるに
人夫数人共側に立りて或は手を炙り或は臀

も暖か平生として曰今多年に風雪の苦
ふし我薫衣薄し愛を以て之を最も妙之敢て之
を防ぐもし乱後の実況概ね如きと
十日晴朝義州を出て三十四度午時平壌館五十
五度朝七時義州を発し石坂小沢武石
柴田根岸大井等送て関門を出る余別を告
くに坂田地行等三人之一別を再會を期し
猶数歩を送り之と再い歩を進め府外の石橋に
至りおれ独騎を上る路傍の流薄氷を結
い廣原雪相白くして雪みて行くこと里許兵站

電信隊に達ふ韓人我糧を義州に運ふもの
陸續絶えず衣白きを故に一路連綿の所
平壌に達し後荒木氏田歩兵少佐に値い先日
托せし一本の梨子を乞ふて行李に收め早く別れて
途に上り坂を越へれば東方より来る者
多し近つき見れば一等監督中村宗則之氏病
を安州に立寄り小愈前進せらるを立談数刻
別れて後騎し四時龍川に達し伊森歩兵少佐
迎へて曰今日閣下の来るを承知し特に一室を
清かして以て候つと導れて之に入れば先日氏ら

病みて共済ふ能はざるを以て此に休息すること少時なり
病室に入る患者輪医部長里見歩兵少佐同
医長一等軍医山崎桂策茲に上り其の病者を
巡診し仮部三等軍医熱病に罹り伊力奴
に衰弱して余が手を取りて曰尚少念共前
進共を布告し壮志尚ほ〳〵余の
心に印す病室を巡視し了て高帽伊藤と
共に食す伊藤善く余を知り談話時を移し
て去る此夕食は磁碗古くして雅余弟子
之を行李に收め行李中ふらんねる襯衣一枚
を加へ書を添へて曰諾し得ずして持ち去
らんと予従僕の怪れんを恐るゝを之を久
手言して納れられざるを恐る故に此襯衣を
以て余に代へて謝辞を述へしむ之
を世間に遺す爰に伊藤之を入れて予
に与へる此夕伊藤特に従卒に命じて屋側
の土を四堀し木箱を置き之を以て
四壁を作り新に厠を作らしむ題して将
軍厠と
龍川府間門の右路を距る事数歩一

石塔あり佛頂陀羅尼の梵文を彫刻せ
共時代二百年許のものゝ一ツ恰好彫
刻實十寸分の非難もへきものゝ類ひ
敢もへき者ゝ